諸忠
烈傳

千代迺礎

へ 13
2910
1

門へ 13
2910
1

珍説千代の礎初編序叙

不学の窓の螢雪を集て。宋の諸家の旧説を摸す。尚其古書の洩たる事。俚信の口碑の傳る処を筆の随意録せし迄年ゆるく稍櫃の盈て。遽莫拙き反古文庫。紙屑籠に入

劣きやすき筆の砧ふうち直さんれの
悪をきうくしぜん善を勧むるたよりも
なりんと那浦寓多忍ぶ知るべ先
其櫝の蓋をとれば底ぬと深き巧も
那くなりたる侵を仮字書み綴り
合せ句読講釈日待の茶話み

是よけんと讃せのつぐ自ら。昔古の
事實を記憶くく甘口ぐるる教中。
公べ外題を世み彙るき忠誠の
義名を朽せぬ人の模範幾八四方の
童幼うかえ見覧賜と志ふ。

本都戯作者　爲永春水誌

仁木
弾正左衛門
直則

君は船なり臣は水なり
水は船を覆へし
慣むべし大なる
荒き風なり

兵工助鬼貫

犬のゝ門を
その者成も
其主を知べし

不義士の行ひ
犬ハ劣れり
甚麼ぞ
人面
畜生
ごとき
犬を

雷嘆左工門

大間
曹益

渡井銀兵衛
節婦の魂
丈夫のごく

一回親の
悪事を
蔽ひ
男を捐て
男ふ
貞なり
憐べし
這一佳人
篠澤武十郎
節婦
於焼

建外記左エ門
兼重

一身を以て
奸を鋤き逆を亡し

國を安き
兼重が義名
千代の末
輝かん

花山主水

若黨
丹次郎

松枝節之助
照秀

足利
鶴喜代君
畑
政岡
鉄扇
乘せく
雛鶯
嵐
奈助

此書の序言に演るごとく諸家の秘蔵を接翠せ堂の中に撰ぶ
御とぎを推敲し人情樣々に綴りなれる中にも感傷の併ひる人情初の
読ふ易らんを考へるを主に依て淡く尾花ちらぬ浅ふ貴を
出せるひろ又を侍を綴りうけ半途より他日を綴る人を又手掛るを
是東例の筆癖なれば苟永一家の風調を淳素の看者八今更のれ著を
結の人ド尤るの落りと勧善懲悪ふ這書の中に省くとめども
多く諸況を筆記をば花の底を叩くまでに山鳥の尾の多くしらん
来る春毎に綴り出せるまでの人と願ふのみ

春水再記

誠忠列傳句読講釈

珍説千代碩初輯巻之上

第一回

東京　爲永春水著

時めくや在鎌倉の其中に黄金花咲くときをひける
里利左金吾頼兼公と別えし人仁義の名将ゆゑ在世
ちふ寇や良月の明らかなるも一朶のひら雲を掩へば
忽地光アをうしなふ逆臣佐鬼賀仁木弾正
左エ門直則等ぐうくみゆゑ須臾國家を覆ませしか

忠臣名士ハ多ハ出て頼業公の若君となる鶴喜代君を守傅て再び良月の光を仰ハ〻其名を未世ハ輝うせし昔古の物語を風俗ぶりハ書改さめて食ハ能く雅童の悪を懲して善ハ勧く金穀の一助とも成まくと拙き筆を採ひげて豆利一家の主中にて忠臣孝子の傳よりして貞婦烈女の物がたり不義奸賊のうゑまでの美悪をあらく監めて不義ハ苟擯せしも天命道に難きを知りて心を忠

義ハひるがえる者ハ多ハ或ハ忠義の心ハ仇りしを金銀の多ハ誘引に思ふ不義ハ隙入もハり又い親のこ不義ハしも其子ハ反て忠信なる者又ハ所までも毒悪にて不義の富貴を求や〻者又誠忠の心を変ぜどに勇をふるハ悪をくゞきて名を末代ハ残せしもの又其中にハ計らずも夫ハ妻女ハ罪せられ妻子ハ多ハ主を殺さるゝと種くなる其中ハ山住留助とゆ者ハり基より男分も強き者ハて生得ゆ〻愚なるとも剛勇

蓮飛の達人なれども力量人に越て常に四斗樽を
一樽づゝ両手に提て歩めどもいさゝか苦労にも
なれど其うに疲労大酒飲て見に参ぐハ呑ぬうちに
まぶ小給の雷助由来殊の外困窮なれども是を
少しも気会せぬ折く妻に見を関ども空吹く
風と听流して残りきとゝハ分ぬ見に御る
物を賣代なして一日も酔ざる顔を見ねば人なる
那を異名して山猿の雷助とぞ呼びふけり是その

顔の赤きゆゑなるべし却て或日のゆうしゞ弱
家の執權会御佐鬼貫方より使来りて俄に
対面なきなるハ呂別なるべきひれ言ひ越て
けるハなるゆゑんと研りなるも須臾ず稽嫌
なりゞゝて直さる鬼貫ゞ館ハのうて案内を
こひけるに暴豪ども、ハ心得て直に鬼貫ゞ居
間に通し菓子茶菓盆を打運び客に変りし客
変様に雷助いとく其意を得ねども基より不

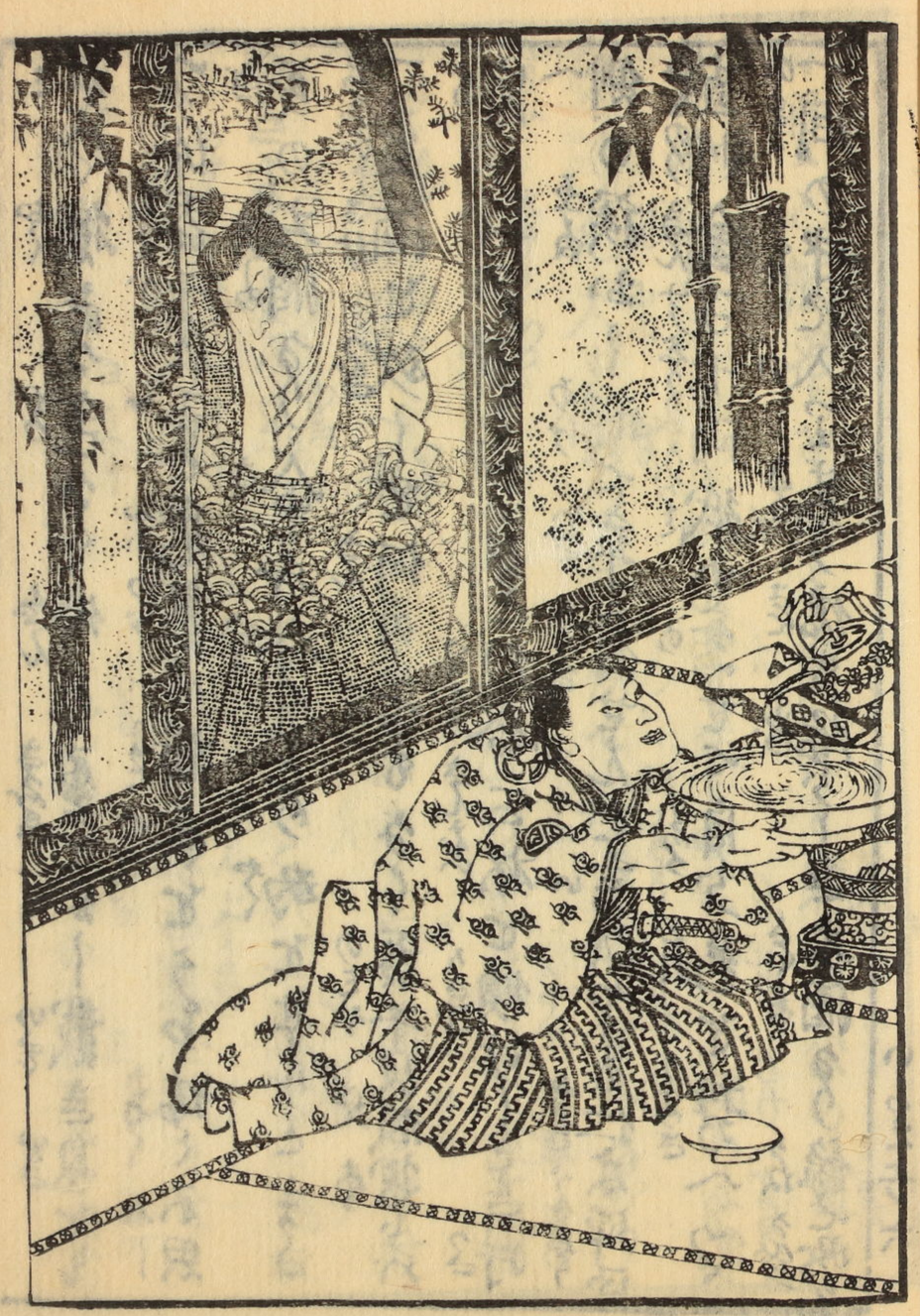
敵の白徒めを ひ立て頭うまえば 格別ひが目もせで
行ゆく孔半助 だうり須臾しを 主人鬼貫一間の
中に入り来り互ひに寒暖の挨拶終うて後 雷
助形容を改め次の方に踏 今ノ日火京の 四用
ひりとて お使を賜はりしゆえ取物もとりひとぎとまま
言葉 鬼貫ハ 打合笑ひつゝ言葉を和らげつゝ 雷助
其 拍子物 ひうしに ハ性 ーもるれ 幸 此方へと 言ひも
醤 助を 間近く 找ませ 暴 お解 る 拍子にて 今日

其方を呼び寄せ ーと 別 ハ存知ハ ひうれ ども 縁に
呼ふ 其方ハ力量人ハ 猪 ーう 家ハ 大酒 を
一家中に 結び ー と 関つる 力と 酒と 競ぶ
ば 目の方が 強き ぞと 言ハ ば 雷助 ま
ぐら 見ハ ま 異る ね 醜 ハ 存 知 る よ つ む
も 強 け ば 明 白 ハ 穀 ま ん 小 生 の 力
量 ハ ど も 今 太 平 の 御 代 ば 一 田 も 用 ひ る
ー ば 何 の 力 る 我 ら 暴 ー

酒も其ごく小生いろて國家ゆゑいまゞ十分に酔て
見ぐ様て仏まゞ強き中り出今うお言いうーゞとと
言へバ鬼貫赤笑ひてのうさゆ丈夫を逸善結ぶべ
今宵鬼貫ゞ手方に酒を振舞ハんに十分に酔て
見せよと言へまて雷助ハ初の男接もうく屠き中を
応ゆるゆゑ頂て勝負より稚こる酒肴を持来り
率と雷助ゆまてひまび素より好物の酒なるゆ
つゆに見まで喰ひつけぬ結構なる珍味なまび雷

助ハ涼くよろこび大盃に引うけ〳〵続飲ゆ呑む
ゆどゆ酒稍数重ゆ及び〳〵ころ鬼貫ハ給仕せ〳〵
若党どもを遠ざけて庄迎ゆひろ〳〵桐の箱より一
外入の杯を取り出し〳〵此杯ハ先祖より我家ゆつたハ
ひろ〳〵都鳥と名号〳〵名器なまどもゆまゞこと見るら
大盃ゆて三杯を傾けハ者を見ぐ其方実ゆ左酒
ならバ速うゆ此盃より三盃を酌みて見よと言へつ
てまづひ銚子を差つて那盃ゆ酒をうく〳〵と酌て雷助

雷助慾み
一身を忘る



見つく猿赤き色なく件の屋をおし載き息をも
つづび呑干しおそ鬼賀ハ横手をうち怪く不思
議の大酒なり命ぶべ今ひとり勧をせんとまこと
一盃酒を敢へ何の苦もなく呑干し故銀らべ
寄う一ツとまてあらまし故合三杯を傾けしとき汗
側の袖おし明て辛肴せんと言ひつくも仁木弾正
直則金子十両紙に書せて自ら巻を携へて
一間の中に入て寄り怪も怪らしき大酒なり銀と改が

力量と酒量を試さんと鬼賀公の宴の
席今賀こぞ〳〵呼び寄せ此今の酒の席
なり〳〵凡人共思ひまび怪て微少の金子なれども
肴の代ハ惜しと言ひつくも件の金を雷
助が懐の辺りへ辛とだりかさ〳〵出ぬ
なき度なまバ笑ふとよろこびて嚴笑し乱
れ〳〵載き損て懐に納ゆるとき弾正懐を我まさく
汝然やどの義量なりを今まで用ゆるもなく僕の

如行の一生涯はむ酒を人慎く呑潤ねびこの身
上にて空しく命終らんと武士するものの本意
うらぶ最期嘗きすうふびや人間はづの五十年とぢ
き浮世の生涯一朱に家貴を極めて終らんも卑
賤ふりて枯果んも皆其人の心ひとり傷く嘗き
業量うみと言ふまて雷助顧を松小生るもうま
うみ武士と産まれ生甲斐ゆへ命一石半石
ゆとも先祖の譲りしを初行を増さ男ねわれ

ひぐ上ゑ

ねど今太平のに惜き力量級法のさしをなりぬる
時ゆ命ゆへ用ひらるべ老のを残ゆゆと言ゆを
弾正関ゆ人ぎいやく支ハ初海遠ひ候命太平の今の
世なりとも汝が業量をなうハして一切立ちバ三日を
待べ今の初行ゆ十情潤ち家貴自在の身と
なべしとひりゆ言語ゆ雷助小徳を
找めをハ又ゆふと問ひ返せバ弾正四辺を見廻し
言語を低めて命とよ既ゆ古語ゆもうゆ

どく女ハ我を見たる者の為ハ容姿士ハ己を
知る者の為ハ死をと今よりく汝を知るものハ是ハ
在るる鬼貫ハ公なり汝家貴を頼ふならバ鬼
貫公の四為ハひとりの大義を勤むべし然るを
ゆへ貪苦を遁れ生涯栄花を楽むんとと此縁
四ゲ兼ねせりと彼俗ハさくさく縁四ゲ甘き言
語ハ案せらまて雷助ハ思案もなく小生武貴ハ
成長バ此役ハ役べき者なられど此身ハ什ん

をすうらぶ命に習へとも為ハあんをべーと関て縁四
新実頂其一言ハ親遠なくバ密ハ頼む好細
なり此方へくと言ひつも雷助の耳ハ是を書也
須臾ひとく呼くを聞て雷助宮本と云人
さくハ是人類兼公の三矢戻りを暗まぎ見記
と言ハを主ー止ら縁四ゲコト音るー鬼ハ耳
首尾よくゆバ其日より三千石の知行を宛行
重き役目を言ひつくべー汝が武術力量ハ

よもあらじとまでけまどに出うるの淫こゝハ
心ゐ深く秘密と人ゐ歳密を語らまると言ハまに
領く雷助ハたゞ三千石ゐ為ありあ〻せ〻心の喜悦
面ゐ見えく稍密淡ゐ時刻移まバ忽て二人ゐ
別まを惜ゐ其夜ハ宿所帰りける

第二回

徒て山住雷助ハ其夜宿所ゐ帰りても如ゝ安ら
心騒〻く所房ゐ入まど寝らまれバ夜の明るを
いづゝ上りて

待兎て常より速く起出ゝ郷十両の金ゐまバ
朝ゝ酒を買ひ取らせて獨り快く飲をもづゐたゞ
ゝ酔に乗り雷助ハ妻と悔び妻世情見まバ
其方ゐ為る貧苦の世帯を顧け舞ゝ苦労を甘
ゝらんがまゞ困窮も長くハままで先ハ金ハ少〻
ゝ〻ゐ身ゐ欲きと思ゐものを分ゐにて補へのと
小判三枚を取り出して渡まを妻ハ左右ゝく受ど
夫の顔を打まゐ驚りしゐ赤の板子貧

苦の貧苦を愛ねし世衣類道具も賣代金
僕の金ゆも差支ゆるお茶がかゝる大金を私に
下さるのゝ多くば其や困窮も長くハさせぬ是を
苦労を乃とさらうとハ彼のみ心で左程り私ハ
合点がゆきませぬと言ハまゝ一番助お茶ひ彼も
按じるゆゑ我ハ不思義の境ひゆゑまるお方ゝ
異義をうけ此身の武義世ふ為ハ是日多くば
大録を賜るよう余まゝば今の貧苦引換え

若紫小僕下女嬶奴麦くの者を石松へ我ハ此
頃那此身貧さ其時衣類多く髮隠多く
乃ち次第生涯富貴の身と多くて栄を子孫に
送ゆるひう家も多き境偉多く此身も嫁や嫁
うゝん我ハ心も美くと淫敬まゝ嫁くゝ嫁の
きくひを覺へぬと言ハつ又も愛ふ德利の酒を
飲る夫の言結をつくゝと関ゝ妻ハ胸のうち
獨り思按をやゝ為ふ為ふ今の潭

假令武士の世に成て出世の人変りても僕の
如行を取うー身が今日見へ功も多きに一豆
粟びの立身よりどこも仏の為に成て下の取
沙汰も鬼貫さまと強正どの仏をなのハせて厳
様に不義度をお勧めし後ハ家の強勢に
なるわばよいとの噂給く支を男ハ支の出世強に
昨夜ハ鬼貫さまへ酒の相手に行きしとの関ハ
吟ど不審の彩く若金銀に目を暗ま世業業ば

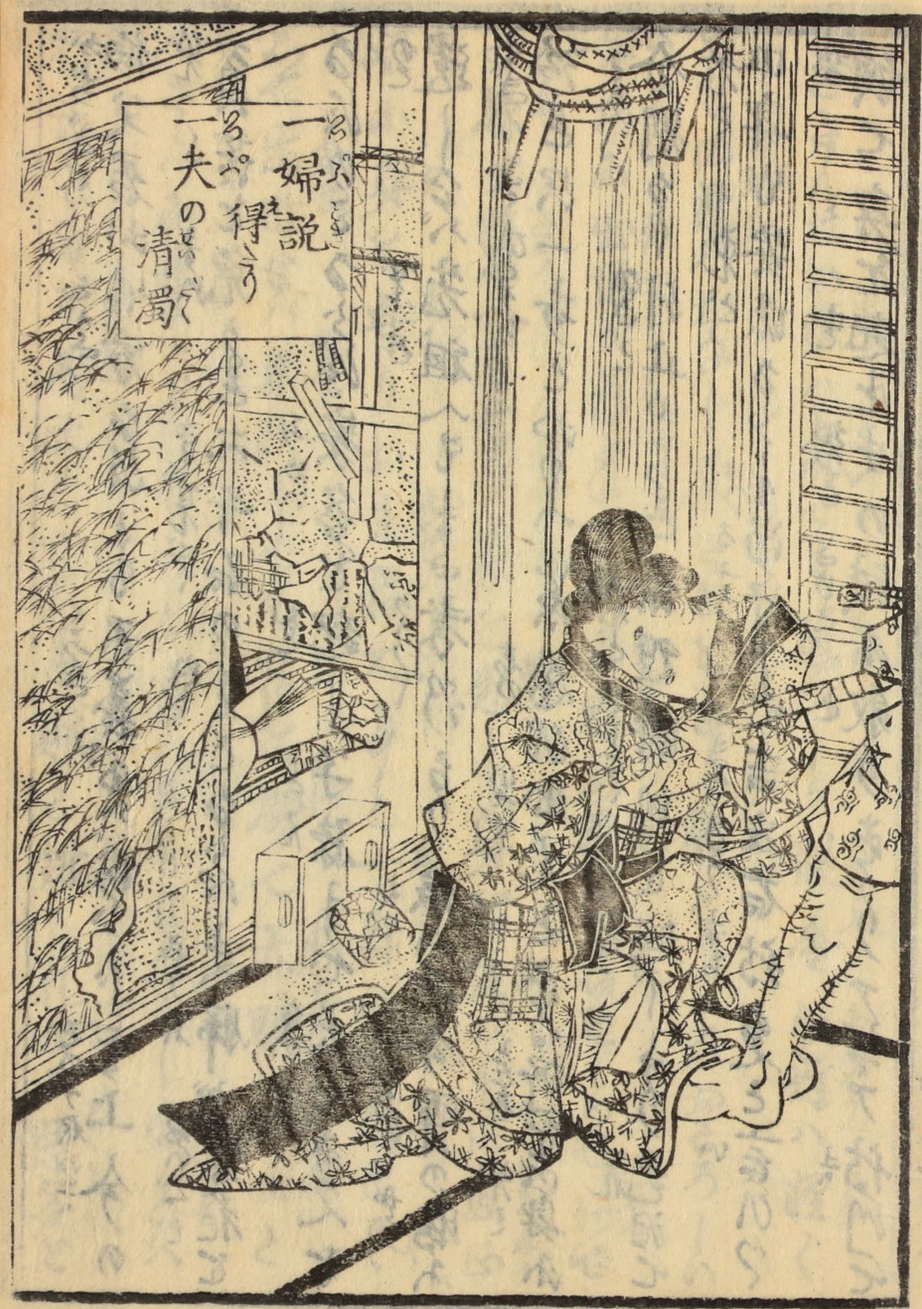
為ーこさに おそろしい不正道へ引入まら是迄まで清ー
厳さまの仏縁を忘れまし支に思へば三両の金の
出所も所うーと思へば楽しくも後ハ胸の濁久う
乗で支の悪仏を強め男ハ止まらせんとはまで出
来ばイやーまだ是とのの強拠も見ぎ変ふる
言へば出しに然うの時ハ意欲なしーもうと振りを
見さうに成でいよいよ悪仏なるべば此身ハ賢人とも
強めんと仏の深に思ハ接しもかしも面ハなら

きぶ只よきやどゝ扶持して其産ハ多く淑せが
鬼の角絹の安うゝれば夫の立居振舞に心を付て
寵ゝとハ留助がしもゝ付ば只一節の立身の
夏のゝ絹の結ぶ結ばゝ一日も速く功を立ゝ名を
為てやうんと其日の暮らしを行うけて稼てあゝへの
大業物もく松助宅が浪治ところの刀を密々に抜
するゝ寵双合せて完ゝと歩笑ゝ今宵暗ゝを
俳ひ寄ゝ思ゝ呼ハ言葉形堤戻ゝを行うて

若うゝやト言ひゝ刀を鞘の納ゝ引ゝ納戸を立
出るを丁ゝ待ゝと言ひ多ゝ妻ハ後より抱きゝ
公淫魔のお茶の接子寵双合せと言刀で強を行る
気ぢどんをト言ハまを泊り留助ハ夫ハとゝう
さ〜強る夫の顔をつくゝと最恨めし気に歩
守り寵茶お茶の言葉とのひ今まゝ怪しゝの
そぶり何様も合点ゝ行程道理と思ゝまりゝ多ゝ止ハ

せぐ義理なれば縁なく人殺し金を持ちかへり
ゆくひと縁と聞くものを女心ゆゑ武士の
妻未練なれば出しまうる能金人にハ隠しも
私ハ遠慮ハ御ぞんじまの明しを安堵させよと
言ハまこと雷助ハ合点おん身に隠さぬ
ども成就なまでハ金所へ機密を漏さぬと
男ハ御ハ明と言ハねばおん身の縁ハ
死理と思ハるり実ハ秘密を立すゆゑおん身の

体ひるゆる密ハ仔細を強るべし必ず人ハ慌て
ると言ひく四辺ハ心を配り妻を間近く找ませて来
ると言ハ部ゆゑ鬼貫ゆゑと深正どの縁ハ家を
横領せんと主君ハ騒酒を走るハ其謀ハ落ル
當りて男ハ得ハ為ハ世ゆゑ今此時を失ハ
三矢通ひの道ハ堅代密ゆゑ主君をさう敷ゆゑ
切ハ取立て三千石を得ゆゑ
主ゆゑ種く思按をやぐらハ鬼貫ハ主君の


一婦説得
一夫の清濁

伯父君の係方なども不義無ふして至上今の
貧苦を免るる三千石の主となるべし然れども
なるべのこるべ家名を起し子孫まで長くさうえを
遺しなるべ先祖へもまた孝行なり然りて今宵の時分
紛れ只一歩とおもへば忍び出んと思ふ所を四郎ふ
分別なるべ引止めらるる余程時刻を延しなり是にて
四郎も安堵なるべ留守して吉左右待つと言ひつ
頑て身を起せ女の袖ふ取りまぐりアレマア待ちて

なるべきんせお茶ハ嫌でも遺ひしろ假令知行ハ薄く
ともも四郎ハ家の跡ふ嚴さうえ敷さうえおとろしの
如ふふ出世ゲ為こと不忠ふ義の名を立て仇で
子孫ゲ業へまさう家を起し身を立て正直正
路ふ身を守りお主君大事と一身ふ忠義を尽
おて出世ず末代までも名を揚て天晴武士と
人さんふ誉られまも甘んとう丈ハ
行ぢとも不義士と言ハれ賊と嫌られ世ふ悪名を

殘さるハ生涯銀苦ゆ暮らしても簡ゞ芽出
るハ如し金銀如何ゆ用を賜ま在不義と知りて
荷擔して現在お主君を勿体なくお前ハ天魔が
業邪一ゝ然ゝ方ゝ行ゝ方ゝハ出存知ゝ
兼さんが志新の際にお前を拵き外ゆ選ゞ云ゝ
ぞゆ返ぐも忠義の二字を仮深の君も高れる
身よ義武二字ゆそひきうゞ勿地家を失ん強ゆや
僕ゝの位ハ今もいまゝゝゝゝゝハド私ゞ分と言ゝと

是ゝのゝぎる女子のさゝ出口と思ゝ是ゝハゝゝねども
ゝゝるゝだゝりハ亡父さんゆ及ゞゞ成代り分処が
物所者内異ハ是を禀さゆゝゝれ身の大ゝ何事
お心ゝゝゝゝ思ゝ止ゝ下さん世不義よ不忠と
言ハるゝがお前ハ恥ぞんぞん世ゝゝ情けゝゝお心
根と或ゝハ歌さゝゝハ屬ゝ理非明白ゆ深ゝ
ゝゝ基より是絶の醫助ゝゝゝゝ妻ゞ言語ゆ現ゆ
もと思ゝ招ゝ義の覺ゝゝ後悔の色面ゆゝ

八重さ一瘠向て居りしが消あらで貴をもとげ我
ものやまりて不義の落入り今宵其方の落られず
よ世の悪名を遺さべきめ縁の方が蔭ありしを知
なん本心の立久りしくば夫の直なる心を感じ安坂の
男を被しめける

文よりして雷助ハ鬼賀方への言訳なければ
病気と被露して四五日引籠て居りしが
或日初色者の方より病気見舞ありとて

鮎の鮨一桶来りしを夫婦ハ分の気もなければ
二ツ三ツ食へとのとしく勧しを吐て夫婦法
個の死しなりける色ハ深山がたらひ雷助が
なん変ひを疑くも案し他へ此の風聞を洩れ後
公の者の言ひつけ鮨の中に毒を入て斬ふる
らのうりとなん色ひを雷助が公の形の者
徳る非道の死の合ふる自業自得とも
言へべきが妻ハ夫の立勝り女の耕る文智

かりしよく雷助が不義を正し懲めて本心ふ
立ち入りて其の賊を生捕り了に命を
落せるを不便と言へども此巻を開の
雅意只徒らに流捨の人情善悪形心を身ふ
なくらべ仮ふ不義ふ誘ひ出ぬ事よく〳〵要心
為の之と例の老婆心を告るのみ

珍説千代磧初輯巻之上了

誠忠列傳珍説千代磧初輯巻之中
句読講釈

東京　爲永春水著

第三回

草表鬼貫が一味のうちふ渉井銀兵衛とのの者ども
男女二個の子を持けるが兄の名を横作と喚び當時
頼兼の扈從を勤め妹の名をお曉と言へて今稔
二八の春を迎へ其艶色の羅ハしき夏舎の花の
春風ふかとろび初し糸桜柳の腰姿桃の笑ミ実ふ

閑月羞花と云ふ女をや言ふべきと一家中ハいかも
さらなり常に館へ出入者までも誉ざる人へなりし
とぞ侍べまと鎌倉なる同じ家中ふ篠沢一角とい
ふ者ありし銀蔵と云ふ会二の朋友ふてありしが件の
お暁を一角が一子武十郎といふ者の嫁ふ貰ハんと
望みしふ銀蔵も他ならぬ一角が夏ゆゑ早速ふ相
談有ひ既ふ結納まで贈りしふいまだお暁をもらひ
取らぬうちふ那一角ハ急病ふて死去跡ふハ一子武十

郎のみ父角が喪ふ籠り明暮悲歎の涙ふひせびふ
暮ることの家ふありしが頃て五十日の忌も果て久しぶり
にて出仕せしふ其日より扈従の列ふ加へられ父が知
行の三百石相続なるべ賜りしかば君恩の厚きハ
骨ふ徹し身ふ沁て覚へず感涙を催ほしまで流くも
心根ふ徹しけるべ夫より益夜怠らず頼業ハ公の
命ふ従て二心なく事へしが ひやど君ゆハ酒ふ交
られ其うち千金の身をつゝまと窩ふ趨里に

通ひ合ひ変日々に増り強くに長じて其さま狂
人に異ならねば人々忠義の心ある者面を犯して
揉ひるゝ人忽地に奥を蔑るのみ非命に死る
者多し是ひとり是れ鬼賀源正根多陽等が仕価
出る密謀なりと遠くも心に憚りしに武士所ハ
歎息し揺りつゝく憚へ奸臣の君を惑し賊
臣の国を乱す事今ふたゝび変ぐゝ忠臣是を
正さんが為に一家の乱をとゝのへん。と言ふのに根
多陽どのハ偏令皆胴ハ申さぬとも此暁が為に
爺親うまゝ我ゆも現在陽なりゆゑに大悪不道
なりとも只一言の曖昧を正さん明白ゆを正さん
身族の情薄きに似たり如是ゆも世人根多陽どのに
一旦対面せしうゑゆゑ悪人に極まらば一変も
再應も異見に曖昧を加えしうゑ丈ともに義引
くべ其時ハ是非もなし陽なりとて此家の大事に
争で代らるべき三世の恩を今に時報ゆゑ

如利をう結ん然うじやくと絢ゐ宮ハ絢ゐ衣て武士
郎ハ或家窩くゐ狼ゑ陽が家ゐのうて案内をんぶ
下女が如降誘引をうたゆゞとゝやゝ賀さるのお出
よと狼ハ基より母親もいそくとして出迎へ的時ゐ
然うゐ餐ゐ武士郎も的氣をく只ようき程ゐ寒
暖の挨拶も済ませ後武へ依先達て父一角が病
中より死後までのお世話まことのろくとのお見舞物
をゞ戴くのお礼ハ多分辱ゐぞんじます申うく

ゆゝど忘ハ明くも出仕の暇をきゆゐ存知の外に大ゆゑ
迷惑真平ゐ免下さりませト寛る言話もよどゝみなく
人品とりひ肖柄まで威なりてさのゝ猛うゐ天晴勇ゝ敢
武士と男ハ母も笑しう気に母へその挨拶ハ入らぬる
ゆまゞ狼ハ入喪せねど四上へまで窺ふてお許容うけ
うゐうゝハ和主ハ奪ゞの氏方ハ舅姑他人ゞましい
挨拶ハうえりて此方が迷惑ゐまゝ。コレ狼和女ハ的を
放ゆとゝて氣の利ゐね賀どゐゐ的ハきくとも酒

ひらくト言ふて お暁ハ恥ゥし気ふ在ト言ひつ
身を起し腹ごろに家丈と男ハ分ける毛相を渡
河の海の奥津朝丈ゥるくも廣ゥ委へ丈の
機嫌を取有頃て腹しくゥる鯽を結び鰐の丼
露煮ふ ゥける公の花松奥桃子盃充て添へて
手出を椀子を武十郎ハ見るより急ふ おし禁ゥ
武ヘアモン男し ゥハ有難ゥどごりまゥが空今日ハ腹
ゥ雲ゥ さるふ 密ゥ お出しのいとしゥるゥがどごりま

をまゥハ先 四酒ハ お頂けふ いのうしませう 徐腹ゥ雲ゥ
さるふ ゥハ 何ゥ丈ふ お公ゥ さるまゥ ゥまゥ 考ゥ度 お目ふ掛り
ゥ丈 どごりまゥ 母ヘアイ腹ゥ雲ゥ どゥハ奥の小院ふ居ゥ丈
まゥが 折角腹ゥが お物を つけゥふ マアひゥ喫て ゥゥ
ゥる出しハ寛ゥと ノウ腹 暁ヘハイ寛ゥう お物ゥ出来ま
ゥるヨ 母ヘ三や 仕家の座 ゥるべし 座ゥのお着を 弁へ出しや 武イエ
折角の四社を ごでハどごゥいまゥがどゥも今夜ハ酒を
いでゥきまゥしゥハ 段ゥくゥのお 射話でどごりまゥ ゥら

皆男の意
正ホ玉石
月丸

自由ならぬお所りなし　母「ヨヤを見でハお松しが
嫁んでくらひげる方がよろこぶヨドレをんなら　銀
吉清どのを　此所へ呼びませう　武「イヤ只今も申通り
密くのお松しの外ならぬ私が　母「那小院へ
往くと久しく　分も遠藤ハるい寛りと那所でお
松しを　武「ハイ左様なら　おしの内ト言ひつゝ立しが
此方を振り向き　武「モシ私がお松しのうち必ず人の
奉公ぬ申ふ　母「アイ　合点でどざいまスト言ひ後ふ

武十郎ハ奥の一院ふ入りつ　閑談数刻ふ及ひしが
頃て武十郎ハ一院を立出　常ふ変ラず面色にて
挨拶さへもそこゝふ我家をさして立帰る跡ふつゞ
ひて主の銀吉清　後て後備の後袍ふ速く出家を
統ひつゝも右手に引提て立現れ　今出行し武十郎を
只一有と　旅出を仔細ハ分らねども　妻も銀もあ
旋き互ふ袖ふ取付て。アレマア結ひて　と　引留るを。
邪ア　とると振り　排ひ旅出を　結ふ女房がまづつき

はく変うろたへ　文房へ行屋の内に伏り知らねども見るさへ
ぞっとする姉様のその狂乱へ火縄まで添へて近寄を
お前のそづと孫が今ぐさ聲どのく顔色変へて戻
らるるを思へば　のよく合点がゆかぬ若やお前の様
縁をそこれ其様子で聲どのを教をそろそろ
まだ　根ハて　去るさうを　知りて　武十郎生て
置て　此身のまま　ぐ帰る途中を　人知るぞ打て
拾るが　遠まへ　そ　訴　放せ　退ぞやと　言ひく

いげん中ノヒ

猶も出んとせるをお暁が　最より取付て　暁　爺様
そるはどふくる　俄　合　少しの　始りとも　現在
聲を　狂乱　打　ひんまりひどうしの　一日も
速く　祝言して　夫　行　振して　斯うして　楽んで
居る　私の　可愛相　思して　行　聲　堪忍
放して　祝言させて　下さりませ　コレ　涙をまぶたを
合さる　流石　悪の　根　奇　どもに　引さる
親　須臾　躊躇居　うして　行　思　按して

打笑顔ゝ面を和らげ　浪へるやど和女が言葉ふ
仔世荒敷を変ハ禁も せんが。コレ娘よく聞けヨ
吾輩もたゞやハ武十郎を天晴武士どやよい聟
おやと心ふ自慢しを居ゝ今日とのふ今日鏡相が
つきと其仔細ハ他でもない此度を君頼兼公ふ身持
よろしゝうだゝくく大家を治めを人ふ器量ふ在
まきねバを君ゝがうもお家の仇必ず日ゝうゞ報復
なり　伯父君鬼貫公の四嫡子なる石之助どのを

世ふ立んと弾正どのをたゞわとしを忠義を思ふ革斗り
寄ゝふ喋合せを仇報しを知りゝ武十郎が獲ゝとの
異見ゝ箇やどふうゝけゝ武十郎をうゝくと生立て
人ふ大りを洩を ふきハ心身の忠義も水のなかとと
思ふが ゆゑふ決絶で只一打とおもひゝが和女が歌くも
不便ゝきバ 聟が命ハ和女ふ預けん 去りゝがら紙ハ
なゝぬ和女が心のあよぶゞけ武十郎を親を自方ふ
ならバお家のあ乃変成就せゝ其うゝでハ今の和

行ふ十倍の大祿をも賜るべし我も得難く願ひて得
さるべんをなすハ聟なり男なりなとを悪ふ思ふべき
若夫ともの兼引せばゝ其時ハ是非もなし縁合
聟でもなを家の大事片時も生てハ堪がたし
降ちゝト言へ捨て奥の院ふのうりける

第四回

前説曽我題武十郎ハ男組為隣が悪ふを知るゆゑ
ふを畫して深やしらどもなく用ゆる事なく

久しきを怠をあくめる極ふ徒てハのうふ言ふとても男ふ
止る夏ハ必ずト男ハ是非なく我家ふ帰り一
間のうちふ閉籠りて猶も思按ふ時後ふ乗も深
更ふ及ぶやどふ武十郎ハ所房にも入らぬ又一筋に
主君のうふのゝ鬼やせんと角やと絵を痛ふ思ふ
況く猶息を机ふ片肱ふらして畜ふ貢を得も揚ぜ
須臾考へ居る形しも庭の面草に時連し耳姦
ちゝ虫の音の一付ふ止しふ公分所しふ武十

郎ハ障子の透よりきゝ覗くゝゐ時しも秋の暁なれバ
露ゐ時雨てかの暗き空に玉兎さえ冴らざるバ覗ゐ
姿ハ見へねども縁の辺こゐ程こそ内を窺ゐ一個の
曲者丈と見るより武十郎ハ赤族きしゞ空も騒ゞ
て近ゐ寄りし短刀の目釘ゆるしして身構をし彷
ゞも知ぬ曲者ハ須臾格子を窺ゐ居しゞ徐く縁
より這ひ揚り障子ゐ辛皮をかけて明るを待
ゐ武十郎ゞ曲者待てと変こそバ苦と叫びて

仆る曲者武十郎ハ道ぎゝと行燈片くるに放ける縁
先逃ゐ顔を見合ハせて武へゐ暁さんゝ暁へ武十
郎さん堪忍ゐてくれ武へイヤ堪忍ゐ
ゐよゐ御前ハ女の身で敵探偵とゐ難に入ハ
使ひゐ出の格子定めて何ぞ有
らうゞ御令ゐ紙ゐ沢ゐもしろまぐ慣ゐ廻ゐ
御前と私ゞ少しの間でも一所ゐ居てハ人の噂も
道理こそ。トサ初う言門ゐ難面男

だと定めて暮しも為なき さらうが世間の義理ハ
何様も欠目ぬ なぞ出用でもなるの多ク義ガ明て
うゝお母公さんとも出一所ゆ お出なさい手時委細
聞ま せうサア〳〵人目ふ掛ら多いうち出もまやく
おかなさいて 誰ぞ送ら せて進ぜガ丈ハのよく
よく なるまい私ガ時分ゝ見て居て なげるゝ家なも
姉ハ多いおしも遠く 内へ帰りて私ゆもなんん
させてお呉なさいトやさしの中でも物堅い男の言

活ふ腹義のなと花も涙ぐ頂史言結もおざり
ちが嘲くおし顔をなげ 暁ハモシ武十郎さん 私ガ
女子の身ひとりで勤うして忍んで参ら を定めて
貴公の思し召ハ満変らしい外で来らとお思ひ
でもどざいま せうガさゝ〳〵然ゝうの 訳ハ多い貴公ゆ
おし〳〵お願ひガト言ふ 角し武十郎「アヽコレお
暁さん飛令外ハ情いもしろ氏呼で二個ガ忍び会ひ
咄しを為ハ不義も同然 ゆ幸今宵ハ閑なけて

late も遠く帰らせ下さい 仔細は翌日開ませうさらば
下言ひつく内か入り 陸子ぴつしやり 逢切て雑面く
見せる男気に お暁は今要どの言ふて取つるゆも
脈著の言葉の夢もちや切まて 雑は秋露ふ濡
増る涙の雨の乾く間も 嵐は机ふ ちらぐと男へば
ゆで悲しくも又恋ゆしき男の公世間の義理はゆる
にもせよ現在妻ゆも寿しき私 ちらと一口言ハせと
とて余のも不義ゆもるまいふ 降りと言へば 情ない

モシ武士郎さんお公強いぶりが武士の本意でも
どざいまいまい女子の身 ちらで秋深更恐んで
あるやどのすつしと沢でどざるまま せうう翌日へ
延しとよのやどうふ ふしふ泉んで 参りませう今
宵 言ハねばお茶の大す 一句言ハせてどさい
まー コレモシあんで 屋うまいト言へど内ゆへひぐ
ちらと 参ふるものハ ひらしく 吹く 松の音のも変も
ちく 秋ハ方下次第に 要るなど お暁ハ いりまく

笑ひ得ぬ
涙の宮の
花ひやう

急き乱まし髪を掻撫の薄まの薄り落世身を
掻き 暁「武十郎さん是かど私が ふしても 一言
応答をもらぬハ何程でも聞て下さらぬハ他合
お気に入らぬとも親の許しと二個が和合可愛
相とも不便とも少し思ひて下さらぬ新う氣
強くハるまいの日光の似合ハぬお前のおもろ
迷も叶ハぬ変ぶり生ぶりへても捨ての身
夫の住居に死んぢまうまと若ひ思ひと

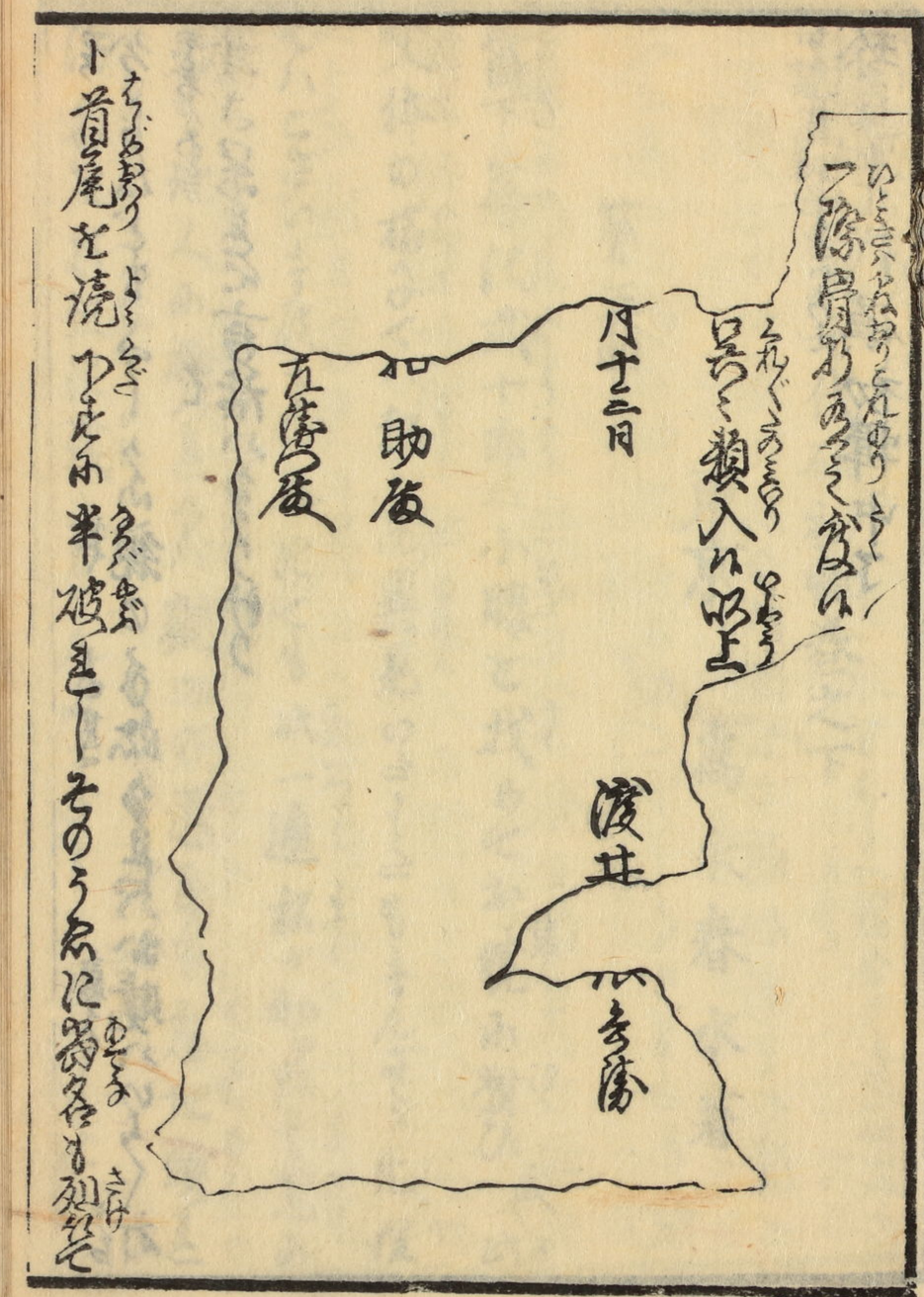
出来ぬ逢ぬこうすもひらうと私ハ史を来しぬ黄
泉に結門に居りまぬぞ人南妻河弥陀仏とこひ
ぶら産婦の懐抱抜くよりも既に自害と見
ゆるときさレ結更と声うけて藤子蹴まるし武十
郎ハ驚光近く寄んで出お暁が懐抱ぶ
顔うち守を云語を秘め 武「モシお暁さんお前が
忍んでお出のときゆの中に思ハぬ文を拾
私ゆ色香に迷ハせ打よくバ悪ぶの自方の引

入道殿親忠の使価と推甘〜ゆゑ然と弘面くうと
ゐ甘しゐ自害とまでゐ覚悟の拵子使ハ然うぐも
うろうこう仔細ハ無物と問へ うけう是里を さ〜ゐる武
十郎ゞ言居ゐ お暁ハ打続き 暁へ とん ゐう忠義と
妄作と那蓑さんのお言居ハ久ゐて不忠でとさるゐま
ゐろ実ハ貴公の妄作通り家来お帰りの其跡でたゐを
知らと武十郎ゆゑ生を垂てハ お家ゐ不忠と族姫引抱出
ゆふをゆろ〜〜とし七梵ゐ〜〜蓑引ゐるゐ支ゞ

賀ゞ助命うくバ和女の力に及ぶゞけ道理を覚て自方ゐ
対ゐ支ゞゐゐバ生てハ変ね お家のお為にや代ら是ゐと
親の作を一筋ゐ忠義と思へバ母さんゆも私の心をうち
明て会貴公ゐ お見ゐうこと若出得ゐゐゐとハ死
ゐる覚期で参りまし〜と姫様の拵子 薄ゐ武十
郎ハ余とと点頭 武「後くお前のゞ〜親子と父ど
大きる相違貞と孝とゐ其ゐ赤心を見るうゐハ私ゞ
ゞ打明てお心しゐゐ沢ゞゐるマア〜ゞ方へト言ひ

ぐら一室のうちに住み入るを武士親公の悪りを明白に
言ふはどふせう面伏うぐらの主君のれ不行跡も基を正すべ
お前のお部れ鬼貫公ハ一味して代家ハ扶順せんと
彼個ハ彼個ど今度の大望人ハ知らじと思へつるが
思ふ千里と強へへの通りうろく知るべきひぐきも
昔を今にいるまで立人を外して身を立んと考りて
者ハ多けれども一個も成就せざる者多く只見丈を
数くゆゑり其所等のあ理を矢合分ぞうけ是

ども一旦怨ハ迷ハ不義の奴とうらまれて逆も
口惜けれども公を盡して陳めを用ひるハねのを
うらぶ私を逆徒ハ引入れんとハ陳ることを公ぶ情
只言ふお前の公ぶハ情る強奴も見も甘ぬハ安の
取沙汰を信じて親れハ忠義ぶ思るものを反らて
不義ハ言ひうをうどと思ひうり知らねども不義の
強処ハ代一通見見て迷ひを晴さよと言ひく
取り出を怪しき書簡ハ焼ハ火に入り披き見るハ



一陣骨折あつて敵入れ申上
ト首尾を境ひ半破まで
そのうちに弱名を列ねて

寄に中入れ兼る類く成れ一陣
骨折る時首尾好相成敵の三矢通り
鬼角人公義に満足の由これ家早川方八近
國元家老中へ書状を以くや達計略のごく
屋敷へ押込
成行の
物不通三千石
家早僧加

分らねども子の親の名跡を出暁ハいろく村
渡き果まで立居ハうりけり

珍説千代磧初輯中了

誠忠列傳句読講釈

珍説千代磧初輯巻之下

第五回

東京

爲永春水著

當下篠沢武十郎ハ小勝を找めてお暁が對人武一式
文体の格まで私が四異見のこしもまんざら元埋
でハございますまい余にても一通私が知らぬ事先が
若も他人が捨る是ゑバ親四の悪るも忍地獄を
汚名を末世に殘さんハまごしも私の身に入り

たゞ親公の俸ひけよからじ今本公ゆ立返り君ゆ
忠義を尽さんとなど是までの過ちも自と消く後の
世まで適き忠義の武士と誉られんゆ口惜や
償の利慾ゆ眼を曇ま世人の謗ゆも聞入ど三世の
仇敵を仇ゆ為ん不忠不義の銀子ゆ親に
持さまとお茶の心汲かるやどのとしくもまと不便
ゆも男ども お家ゆ仇為ん親公の悪公ゆまで諫て
用のらまとぞハけう糸ハ是非もなし男ゆりとそお家の

お為ゆゆゆよう仇敵ゆならねば叶ハぬ武士の
忠義の二字ハ詮方なし嗚やお茶の心ぞ義理も
情も無へ仇し男と恋ま見んが是もる世の恋
業とおきらめゆ お暁さんト言ひつゝ一雫の
涙ゆ初まし赤ひ お暁ハ見るよりまうろうね
ワット一驚 泣入つて須臾応も出ぎりしゆ煙ゆ
涙を打拭ひ 暁ハ勿体ない貴公のお言葉ゆ恐ゆ
存ト仰ます 開ハ呼ゆど恥うしの爺さんの身の程ひ

殺うとハ知らぬ貴公ハ悪ものの自方ハ引入れんと
女子のまゝハぬゝ今宵ハんで糸切を今更
思ハバ面目ないお許容なまてゝさいまゝト打ち
見ると居ると しゝがなら公ハ思案して形容をひらと
言葉を正し 暁へモシ 私ハ豈と貴公ハお願ゝ
まんゝがお聞なるゝてゝさいまゝ 武へ今ら好細ハ知り
ませんゝが改さまゝと願ひとマア 分ハのゝすゝでゝる
まゝ子 暁へものお願ひとやまゝハ別のゝすゝでゝる

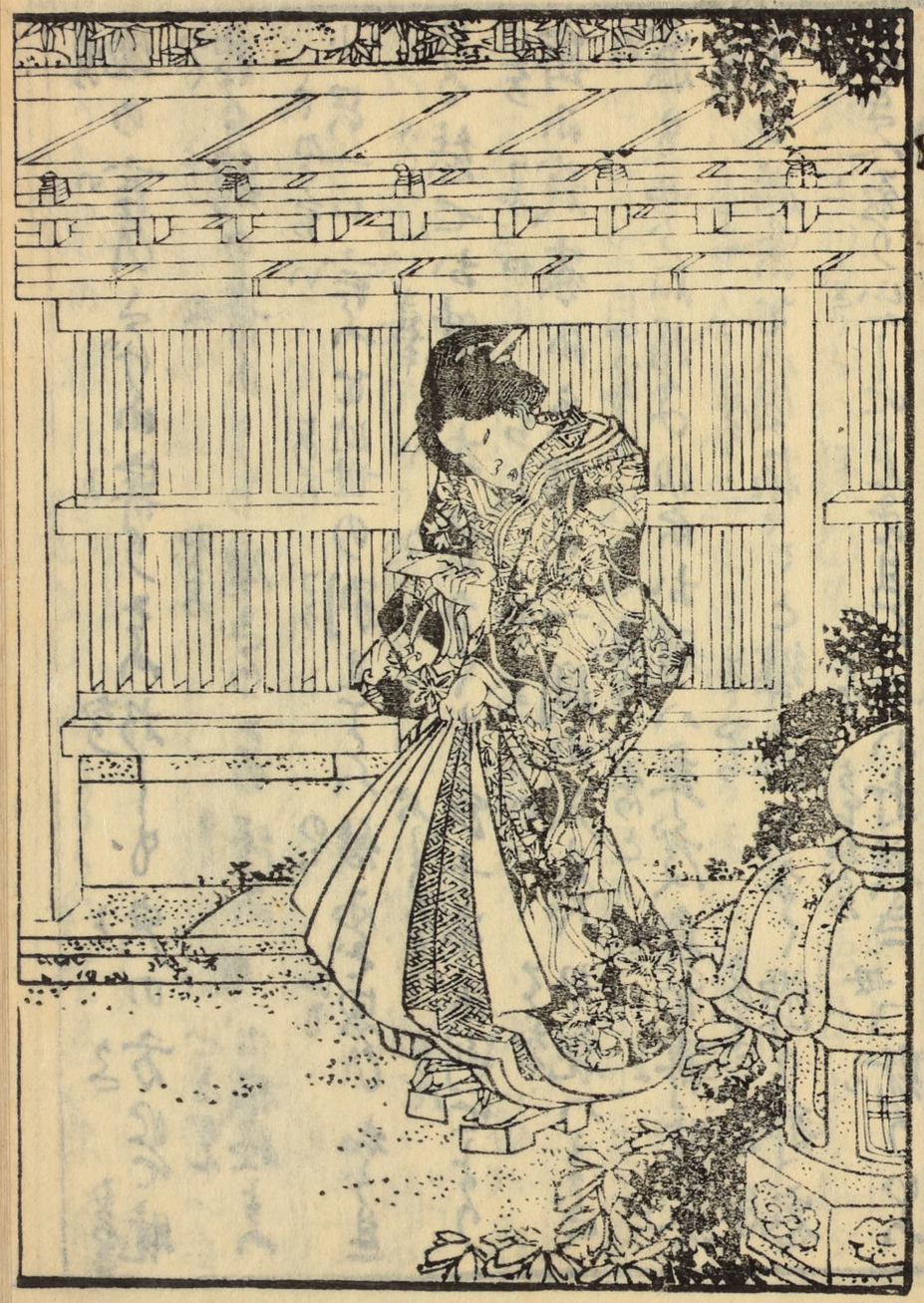
ませんゝが ト言ひうけて そ先ハ少し言ひゆゝき 松ゝ
うしゝが思ひ切りて 暁へ私ハ分ゝ 衣状をゝさい
まゝ 武へエなと言ひなる 暁へ縁を切りてゝさい
まゝ 武へなるゝど一貫ハ親の許容をうけて 結納
まゝ贈りハなるゝまゝ盃をなゝさでハゝしぶん
お弟ゝが望ゝなゝ 縁を切りて進ゝなゝゝんなら
親公の悪ゝを 暁へサアゝ貴公ゝ五異見なゝさゝ
思ひ止らぬ那生意地 私ゝ分ゝど孫さゝなゝく義

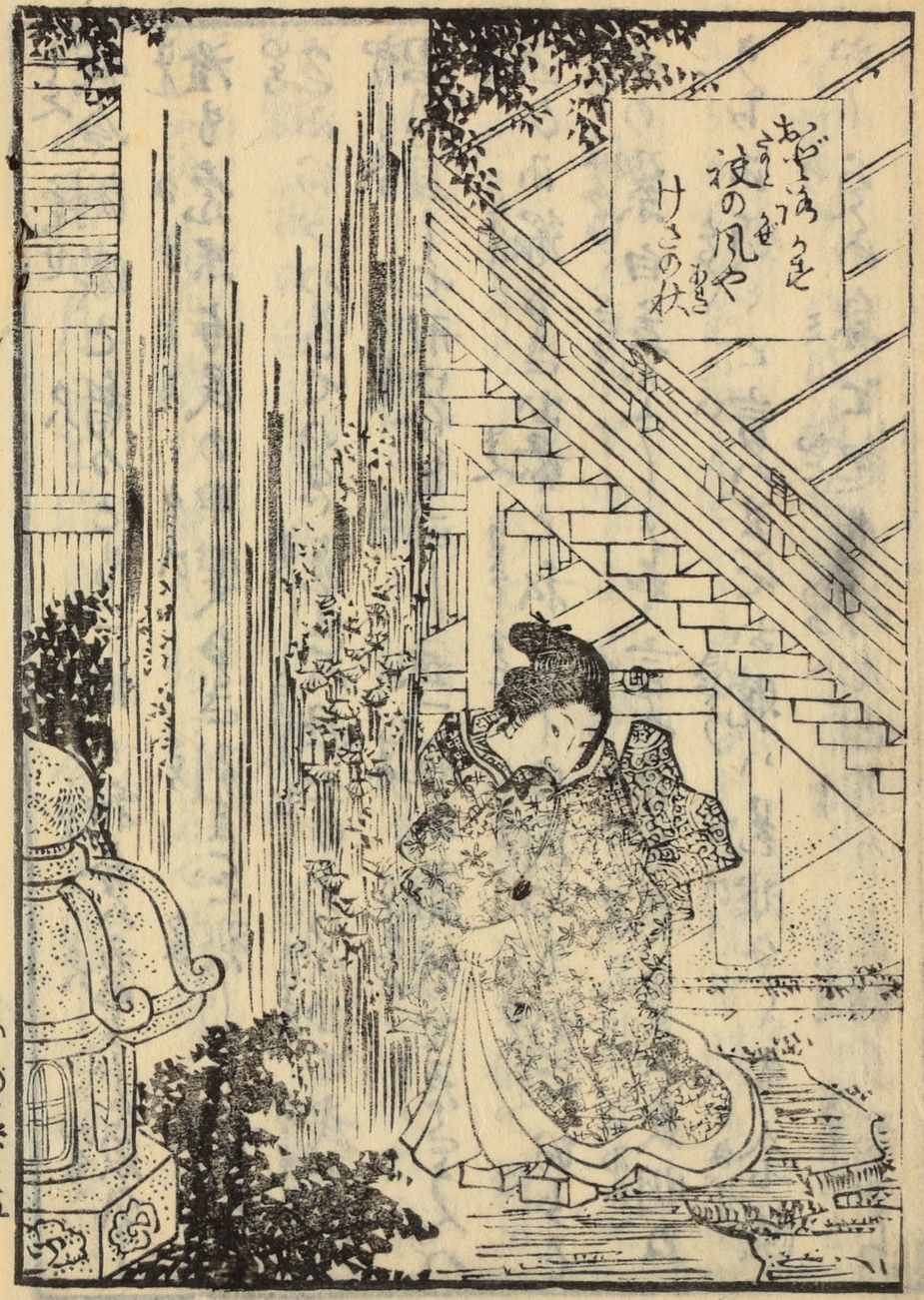
知ハあるまじき事を知りて主君
なるべき不義と忠義の親子
寧そ親言はんちふ縁を切まゝ捨ひ地人者公の
忠義が立ずとも親の不忠が顕はまじきる罪を被
らうと他人同志なら様ひハなるモシ仇合京がまゝ
なら分卒を切きの一札を言はまて須臾武士帝ハ
打按じく居らしが分男ひけん小勝を找め武士佐も
稀代なお弟の貞心縁を切きと親公の悪るり

露顕しこその時ハ私ハ雖義をうけぬうめ苦う知る
うハうくハ義理ハ縁ハ切らきねど切らねば義
此場の忠義ハ縁を切りませう 暁「文を貴公が
江兼知ら分卒を切きの一札を武「其を切要
代一通 暁「エちんら私ハ代寄書を武「進て仕者ば
親公の不義を諫義の縁も切きの一札 暁「文
で私ハ孝行を武「一旦 なげるのも弟の
義心を無ハせんる寸志なら私の情と云へ

縁を切るうらハ此後何程の人ありとも忠義のあと
ひきうめて必ど怨んで下さるゆゑ義理も情もつき
ま人ゝ男の言葉を実毎に嬉しくも又悲しくて
涙ハ応も甘ぎりしゞ形てハ果じと思ふにご頼て併の
一通をおゝ頂きて懐ハ納めても猶おさまらぬ哀
別難苦の血の涙泣じ是一どなやゆくに尚落
増る家時病振の被も何問とあて夫婦とあ人を
乗とふ長い月日を昨日と待今日と暮して飛者川

低令渕瀬と智るとも二個ゞ和合ハ変らじと思ひ
澄も京京与民の甲斐なき別まで悲しやト言ねど
色ハ白ハ壮士のよるゆゑ武士ハ
男の直して形容を正し武ハ既ハ難縁を為ごう人ハ
互ひハ縁なき出来と私ハ〜の間でも形て何ふを
ゆの緊白立ゞ言ハるも尽くまで歌明ね
うちハ頻ゝと言ハまてお暁ハ是非なくも余波
おゝ気ハ身を起ゝ行んと為ゝ立婦り泉何ゆら




あやうき是
夜の風や
けさの秋

物の言ひ様に寄りて戸の方にて暁告る鶏の音のうち殘きの情に暁へ出機嫌よ
ト只一口言ふを世の別れとハ後ゆゑ思ひ知らるる
ける怨てお曉ハ本意なくも武十郎に別てより
密に我家に立帰り一間に入まゝ母親ハまゝ
寐もやらぬ枕ゆゑお曉ハ率度身を寄せて今
宵の始末を箇様こと繰落もなく彈り那密
書さへ取り出しこれを見ば母ハ打驚き母へ斯うい

ふ
徒枕のかるくらハ絶ひもうき爺公の悪ゆ。とも知ら
ざるべ今ゆ今まで和女の婦りが至いの家情ハ和女の
働で聟を自方ゆ決めゆ公ゆ爺公ゆ忠義を立さと
ろう若さもなく爺公の氣質なりく許容ハ為
ゆハど鬼や言ひしゆ角やせ〜ゆト獨り角のを癖ゆ
去ゆ思ひがけない爺公の悪ゆ孫ゆ為ゆ嫌ての
片意地和女や私が言ハバとて伝ゆ深ゆを為ゆべき
其ゆ家兄の横仕曉ゆ無ハゆよろゆ生涯の家爺

公は悪るのたるとも助けハせじ命
をハなんぢ和女と私二個が公を尽しことに其処が
女子の甲斐なきハ入ざる世話と此ら迄も遠慮言
話ハするべして然るも爺公の公長の年月
連添へど初る夜俄のひらうとハ今まを知らぬ暮せ
ども妻子の歎きも顧ざ君のれ恩を仇ふして
お家を横順なきうとハ丈なれども大悪人若うの
親を拐から夫ハ引智和女が孝公是まで慕と

賀どのと縁を切ッても此密書を他人ハ見せじと
云り遠慮し和女が物の苦しさを思ひやるなど不
便やト言ふも涙の流用を明方近くなるまハ一
間の襖にて銀之丞が喧嘩変の関ゆるなど母子ハ
疲きをとくハ其身の外房ハ入ッまふける
伍者云く是より後お暁ぶるにつきこと長き
る譚りの是ども春水の腹稿なる余情
ひまどハ須斯這ハ筆を止めて此続の物語ハ

第二編ハ妻しく出せり今此次ハ別ハ烈女政岡が傳なれば看官その心して
読め人とゆ

第六回

粤ハまと建外記左衛門兼重と云代々家老職を勤る忠義無二の侍あり其の妻ハ政岡と云女にハ生れつゝ心ざす兒ハ容貌さへ醜くうねわ政岡二十二歳の時同家中なる伊某方へ縁付て男子一個を出産しハ嬉しくも夫を失ひ其後絶て他ハ嫁せず男姑ハよく〳〵人て更ハ女の道を乱さず恪て月日を経るやどハ頼兼公ハ不行跡ゆゑ雛川の下屋形へ隔居せらるゝ嵩年経三才なる鶴若代若を世ハ立て一國少しハ治まるども奸臣透を窺ひて初若を害せんと謀るを嬰くるまゝ忠義を思へ家人ハいきくうもはゞせず初若守護の為ハとて那政岡を本國より藤倉へ

宅ら出て了に乳母ゆゑ〳〵ふける其くらゐも改器が
藁倉へ出るとき兄外記方へ招き餞別の杯
みど文さふ海て後四辺の人を遠ざけて改器を
找まき外記「コレ財よく所よ武度多くの家中のゆゑ
女子の和女を撰ミ出し藁倉へ来さるゝ兄が顔
をも疑ひ紙て代うゑもうき面目うまども又武うゑも
うき雑るゆゑ并ハ言ハぢとも心得ふうんが今藁倉の
一家中ゑ藁ハ逆流ふ組せ〳〵ふ余出ハ宅ふ大

文の場行ふて鶴彦代君の中身の安危ハ和女が心
ひとつふ有り怨を捨て我ひを捨家を捨身を捨てた
一筋に若君の中身ふ差うき指ふ心を尽して護
ぢ〳〵出て女子の和女の心ふ及ばぬもひうんと
思へゞゆゑふ嫌てより怨ゆ重ゝる武一冊巻を和女ふ渡〳〵
置けバ心ひとつふ落ち付ハ時ふ密ふ武書をひらきゆバ
うゝ〳〵自得出るよう〳〵ひうん若女ともふ心得給くバ余
人ゑハ宮へ〳〵ゆ嶮松枝節を助のを忠義義二の行ゆ

我さへ公をゆるせゝゝなまバ那にハ密夫を打ころして相
手なりとも悪くらべを解ハ世間ありがゝ落るゝ
政吉ト説ふきまゝ明奔ハ感涙をきうハ我ひを覚
元ゞ順吏首も得ひげざりしが消ひて形容をひら
たゝ政ゝ兄若の今の仕身に成ゞ骨ハ形まぢハ公の
底ハ秘密バ候今悪人お家ハ悔り奈ひる仮病を
なりとも松枝どのと公を合世命ハ都ゝ守護せんハ
若若さゝの出身のうゑ必ぢ慈ゝまでおゝ易く

思ゝ世ト清き心ハ外記左衛門ハ嘉笑ゝ気ハ お安須
外ゝ男ハ記増る和女が公底今の言葉を関ふふ我
公落居ふり頓く藤の淫偽ゝ一日も速く那地ハ切り
若を守護なゝ者り侯奸邪智の輩の所存をひと
見抜ゝふ密ハ我ハ報知せよ我まゝ打て見合
せて逆流を云を多を為んつとあよゝゝト言ひ
法くも又盃を設めてやざとゝさを設ふがおゝ頂き
ゝ食笑て政ゝふふ按ず拝ぶる若若様ハ

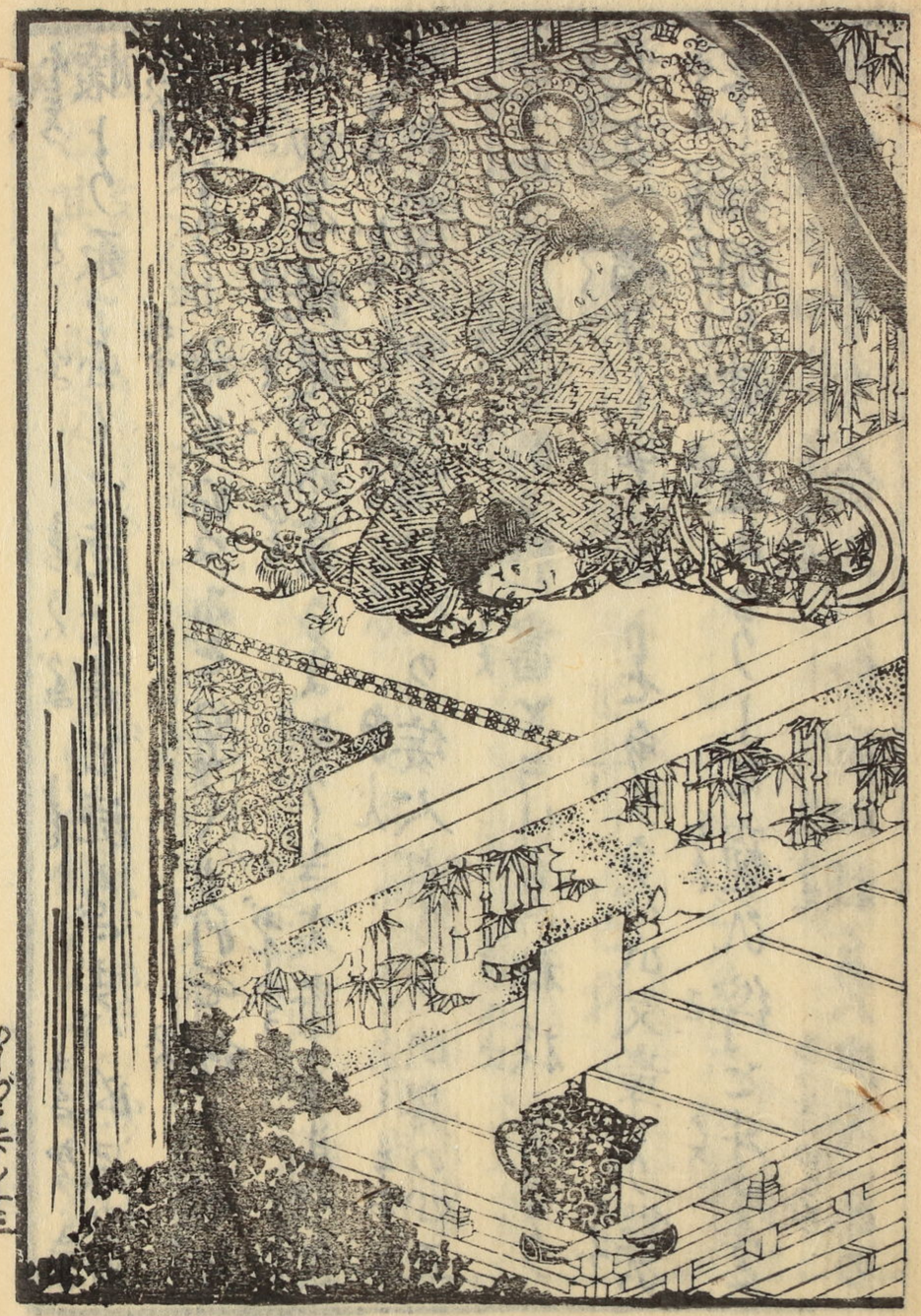
政宗が命令火水の中に入るとも大切の主君を
頼て芽出度吉左右を外へ〻繁〻その一言さらば
余波の今一献と言へばまさも杯を受くし兄弟が
分を劣らぬ忠義と忠義を余波の時移り変
更て家の帰りしが程なく旅の仕度整へ出でて
藤倉ゆゑ登りける

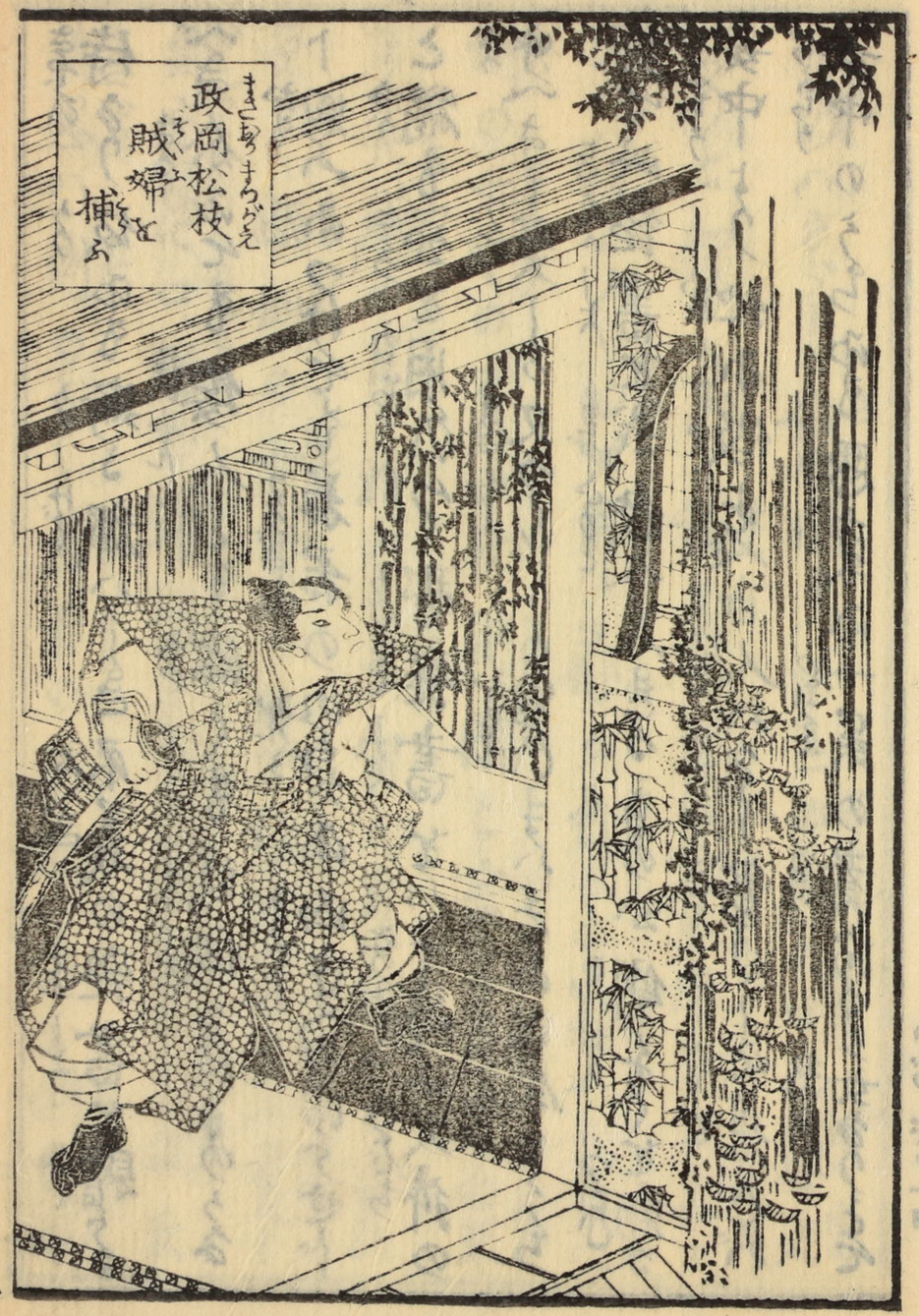
這時松枝節之助照秀も初君守護の為に
とて本国ゆて撰〻出さる政宗が藤倉へ立し

日より十日程もたるとて藤倉へいろいろを
ろり松枝が情ハ実二編の委〻出さる
再説政宗ハ藤倉の内のろり鶴寿代君の乳母と成
ろり昼夜君の辺りを離さず藤食を奉
命の賛て須臾も外の為り忠義一筋の仕〻
ゞ初雅外の君君も上き乳母の〻と思ハ
かゝの君も政宗が御側の為ねバ婆尼の人バ
ゆ〻しく〻思ハゆゑ猶も外を尽しく内外の乳を

死り御もゆゑ沙せねバ悪人間を窺へども政
長ハ隅ゝまで伎倆しるの死骸とるまゞ分辛政
長を罪ハ藏し置後繹を斗らんと稽く工夫を
なせしことを発よ うし変りき却て或日の夜
政長ハ若君ハ附添ひて お庭先へ出し附なと
ゝく尤りの袋の重けまバ多を入まてさゞり見るハ
者ゞ入まとるゆや一通の艶書ありけまバ不審ハ
思ど其袋ハ内懐ハ納め置き側ハ人多き折密に

懐より取出して先上書を読ぐせバ政長の若
松枝より ト恐ゆるものゝ ゆゑ所うゝ有
押切て読見るハ宛まゆうき文章なまバ勿
地ハ男ハ情ハ剣の侍人どもが ハ身の正
きを知りく解と知る艶書をうら人松枝どのゝ
我方へ清りしハ ハそ多ハ文章より艶ハ
生ゞ二個ゞ深遠ハ ありを窺ひ繹を斗らんと
伎倆しるん 余人ハ知ゞ松枝どのハ忠義一路の




政岡松枝
賊婦を
捕ふ

侍り奴ゆも斯る職ハしき不義の艶書を贈るべき分ゆも侯人ども弥くも仮倆ゆ及ものゝうゑト男ふゆつけても若君の御身ゆ凶変のひらせゞと猶も公を用ひて那艶書をバ手侍ゆ火鉢の中へさゝ焚しゞ又つくゞくと思ひまハせゆ厨のうちにて此艶書を我後へ入るものゆ側をくを動る女中より他ゆ做もべき人ハなゝ怪うして見るべき女中のうちゆも悪変ゆ一某の者ゆなりとそ

ゆ思ハるゞ分もひらゞバゆ見ゆ厨の中に悪人ひりと分るゞ詮義を甚バ不忠うゝんト男ハバのよゝくゆを用ひ那ゝ色と家のうちゆ側の女中のその中に渕瀬と言ゝ女ゆりて年まゝ廿歳ゆ見られねども戈智とひ制ゆと言ひゝく頗側の女ゆ雅ゆて及ぶ者ゆ奚中にて口利と評判さるゆどゝりゝゞ或歌故ハ剣のゝく若君の傍乳ゝゝゆ側ゆ那

瀬ひとり地ぬく人も通らざりしかば汝は横て
より瀬激そぶりを仙は付くるを何と思うん
疑ひければ人う青こそ形女が仙を試し見んと
思ふゆゑ若者を流窟せ眠りし躰をもて
あて居るとも知らねば件の瀬激ハ汝は眠りし振
子を密うを覗ひ居るうしが須斬ひて完ふと
打笑を頻てそろ〳〵這ひ寄りて汝は懐を
大事にうけて入壺〳〵外記友陽ひよりの賜りる

那一冊を奪ひ取らんとき〳〵先を汝は
ちうと捕へて動らざとふ社頭ぢぬと思ふにぞ
瀬激ハ蹴りを仙周章振り放きんとあがけども
大力の波は由ゆ〳〵振り切る事もなりぬ愛を
立てハ身のうを と思へバのく〳〵うろ〳〵て片手を
捕へらるる振ひ〳〵らんとする所を汝は解ふ
身を起し物音ふ若者のお目覚さうく
やト捕へる手を捻へ〳〵撥ふうと雇〳〵

安て松枝どのくゝと二声静うゐ呼び立てバ雪
うゝお次ゐ宿直せゝ那松枝節を助ハ分ゆゆや
と打叩きの寝所ゐ我を入るを政岩見へと呼び
近付け今のは細を導り政「今まだ逆流ゐ一
果の女四苦労ゆゝ今雪の中に密ゐ出吟味ゆを
ゞゝト言ハ是て松枝一筋ゐ及ゞ拝変ようる
測断ゞ引立んとしてよゝ見るゐ内の程ゆ
舌を噛切りたゆ息絶ゝ拝ゆ二個ハ多花殊を

為ゆゆゝ此うゐハ測断が
部屋をよゝ考味しこうゐゆて若も怪しきゐゐ
らバ文を捲ゐ笠義をきんト俄ゐ人を差ハして
測断ゞ荷物ハ言ゐ及ゞ部屋の隅ゝ残り
ゆく吟味をゞ内ひとり怪しきものゆらぎれバ
此中委細ゐ書認め外花が方へ差ハせゝとゆり
是ゐ仁木弾正が使価出せゝ文にて今測
断ゞ記ゝるゐゝ了に政岩松枝両人が勇の

疑義あらば幷に第二編を見て委しく
知るべし

珍説千代磧 二輯 三輯 引続き賣出やう

柳北軒 爲永春水作

珍説千代磧初輯下了